



山陽スピリット ニュース No31

2023(令和5)年5月8日

発行：学校法人 山陽学園 山陽スピリット推進室

上代淑先生の教えを受けて

一 吉行盛代の生きた道

元山陽学園大学教授
海本 友子

はるか明治の山陽学園草創期に学園で学び、上代淑先生の精神や教育をしっかりと受け止めてきた女性の歩みに、思わぬところに出会うことができた。

この女性の名は吉行盛代さん。岡山をルーツとし、全国的に名の知られる人を多く輩出した吉行家のある意味、グランマ(祖)とも言える人である。

岡山での吉行家の足取りの始まりは御津郡金川町草生村(現・岡山市北区御津草生)に見える。

この地に生まれ、一代で西日本有数の土木会社を築いた吉行澤太郎が、本稿の主人公盛代さんの夫で



左より淳之介、盛代、エイスケ、あぐり²⁾

あり、新興芸術派の作家・詩人(エイスケ)の父であり、美容師の先駆者の一人として知られる(あぐり)の舅にあたる。エイスケ・あぐりは、文学・演劇の世界で名を成すことになる淳之介、和子、理恵の父母である。

この吉行家への扉を開き奥深くに導き入れてくれる方に出会うことが出来た。淳之介兄妹のいとこにあたる、吉行夏二郎さんである。私が現在担当している山陽新聞デジタルのコラムとカルチャー講座の取材の際に繋がったご縁である。

この方が長年にわたって、集められた貴重な資料と書き溜めてこられた膨大な文章(ブログ“小説を読

もう”「夏ヨシユキ」³⁾)を見せていただく機会に恵まれた。綿密に調べ積み重ねてきた資料の重みを感じられるもので、一族の有名人となった人だけではなく、その周辺の魅力的な人たちについても、優しい眼差しで、その人となりや丁寧な描き出ししている。

淳之介は芥川賞を受賞した有名作家であり晩年には芥川賞をはじめとする多くの文学賞の審査員も務め芸術院会員となった。すぐ下の妹の和子は女優として舞台やドラマ、映画で、87歳の今も活躍し、巧みな文章で随筆も多く書いている。また、いちばん下の妹の理恵も芥川賞を受賞し、兄妹での芥川受賞は初めてのことで話題になった。この三兄妹の父、エイスケは、15歳で雑誌『ダダイズム』を創刊し、「新感覚派」と呼ばれた文学作品と鮮烈な生き様を短い人生に残している。



岡山桃太郎通りの歩道に立つ淳之介の記念碑

さらに、平成9年NHK朝の連続テレビ小説「あぐり」が放送されるに至り、なんと吉行三兄妹の母、あぐりさんもスゴイ人だということが話題になった。ドラマはあぐりさんの自伝的随筆『梅桃の実る時』をドラマとして膨らましている。岡山弁や見たことのある岡山の場所が出てきて、岡山人には特に興味深く人気のドラマだった。98歳まで現役美容師を続けられたステキな女性である。

あぐりが15歳で16歳のエイスケと結婚したこと、17歳で淳之介を産んだことなども自身の思い出として、淡々と語られている。この結婚に乗り気であったのは姑である盛代さんだったようで、あぐりに気に入った様子はドラマでも描かれている。盛代さんはあぐりが東京へ移り住むと、自らも東京で生活

することを決断し、死ぬまであぐりたちと暮らしている。

この盛代さんが山陽学園出身なのである。

この盛代さんについての興味深い資料を、夏二郎さんの文章の中で見つけた。

山陽新聞のコラム⁴⁾、「あぐりの母、吉行盛代さんへのレクイエムー職業婦人への自立を勧める」(1997)とその底本である『上代淑研究』(山陽学園大学刊)第3巻所収の論考「“あぐり”と山陽高女ー吉行盛代さんの紹介ー」である。

元山陽学園大学の太田健一教授が執筆されたこの文書に、岡山県立図書館や国立図書館、山陽新聞社などで吉行家の歴史を調べるなかで辿り着いたと、夏二郎さんは記している。

これらの文書で太田教授は、山陽高等女学校(以下「山陽高女」)出身の盛代さんについての足跡を紹介し、山陽新聞のコラム⁴⁾の終わりに、「この盛代さんによってこそ、あぐりの自立への助言ができたものと思われてならない。」と書かれている。

さらに、太田教授は「山陽高女の機関誌『みさを』を繰ってみると、盛代さんの足取りについて若干の事実が判明してきた」⁵⁾と、より詳しい情報を以下のように紹介されている。

その第一は、盛代さんの旧姓は成広である。成広姓は岡山県御津郡金川辺りに多いと聞く。吉行家は御津郡金川の草生であるので、吉行澤太郎氏とは近い居住地にあった。

その第二は、盛代さんは「明治36年技芸専修科卒業生」である。同年の卒業生は技芸専修科3名・本科15名である。明治19年開校した山陽英和女学校は、キリスト教、英学、漢学、裁縫、唱歌などの教育により知徳兼備の女子を養成しようとしたが、良妻賢母をもとめる社会風潮の影響を受けて、教育内容に手芸・箏曲・華道・茶道を導入し、また技芸専修科を特設していった。

その第三は、盛代さんは「明治37年前後に結婚して吉行性に転じ、金川村大字草生775番に居住した。その後、居住地は明治41年には灘崎村大字彦崎「中西屋」、同43年岡山下西川町89番地、同45には七軒町25番地、大正2年には内山下、のち桶屋町へと移転している。恐らくは吉行組の土建請負業の発展に照応したものであろう。

盛代さんは、卒業後も同窓会活動に積極的に参画してい

る。明治41年3月24日開催の同窓会大会では、欧米視察より帰朝した上代淑先生の欧米婦人のボランティア精神に感銘をうけ、また大正10年には山陽高女での矢島楯子女史の講演を聴き、世界矯風会の様子や欧米における婦人についての見聞をひろめている⁵⁾。

この盛代さんについて、孫にあたる夏二郎さんは、一祖母盛代は、西洋の息吹を伝える校長・上代淑の先進性、世界の広さに憧れその渦中に身を置くことを渴望しつつ、後添えとして亡姉の夫⁶⁾に嫁ぐしかなかった。自分でも表現しようのない違和感に包まれた結婚生活だったのではないか。一とその心の裡を斟酌している。

明治19年に開校した山陽英和女学校(山陽高女の前身)には最先端の女子教育があった。そこで学んだ思いを息子の嫁のあぐりに託し応援したのではないかというものである。

あぐりは上京後、当時最先端の美容技術を修めた洋行帰りの山野千枝子に弟子入りし住み込み修行までしている。盛代はその間淳之介の面倒を見、エイスケとあぐりの家を守り応援し続けている。この盛代さんに関するエピソードを追っていくと当時の自立に向けて進む女性像が見えてくる気がする。

1)



草生の吉行家墓地

2) 吉行謙造所蔵

3) “小説を読もう”「夏ヨシユキ」：作品一覧



<https://mypage.syosetu.com/mypage/novel/list/userid/707247/>

4) 「あぐりの母、吉行盛代さんへのレクイエムー職業婦人への自立を勧める」山陽新聞、1997年9月13日

5) 太田健一(1998)。「あぐり」と山陽高女ー吉行盛代さんの紹介ー『上代淑研究』pp.17-20. 山陽学園大学国際文学部比較文化学科

6) 亡姉の夫：盛代の実姉・音枝が吉行澤太郎の最初の妻。長女・由子を設けるが明治25年に病没。後添いとして盛代が澤太郎に嫁ぐこととなった。